

迫^{きこ}古墳

福岡県田川郡方城町迫所在古墳調査報告

1977

方城町教育委員会

序

この報告書は、方城町教育委員会が国・県の補助を受けて実施した迫古墳の発掘調査の記録であります。

当古墳の発掘調査の発端は、最近の社会福祉向上の政策により、田川郡内でも下田川地区に医療施設の不足から、当町内に公立の総合病院を建設することとなった。このため当町が用地の取得ならび造成を実施することとなり、建設予定地内における埋蔵文化財の保護が問題となった。このため県教育委員会と協議を行い、事前に分布調査を実施し、円墳1と横穴群が遺存しているものと考えられた。

しかし予想に反して造成地内において横穴群は発見されず、円墳1基を発掘調査するにとどまった。

円墳は盗掘等を受けており遺存状態は好ましくなく、決して満足のゆく調査の結果は得られず、発掘調査の記録である本報告書を通して文化財に対する関心を深める方が一人でも増えれば、幸いであります。

このたびの発掘調査および本書の作成にあたっては、県教育委員会文化課の皆様をはじめ関係諸方面の方々の多大なご援助をいただき、ここに記して厚く感謝の意を表します。

昭和52年3月31日

方城町教育委員会

教育長 稲 富 明

例 言

1. 本書は、昭和52年度に方城町が、国・県の補助金の交付を受けて実施した迫古墳の発掘調査事業の報告書である。
2. 当発掘調査は「迫横穴群発掘調査事業」として国・県の補助を受けたが、調査の結果から報告書名を「迫古墳」とした。
3. 発掘調査は、方城町教育委員会が主体となり、福岡県教育委員会から担当職員の派遣をうけて実施したものである。
4. 本書の執筆は、調査を担当した教育委員会職員浜田信也に依頼した。
5. 迫古墳の発掘調査にあたり、諸種の協力を与えられた関係各位の厚意に対して、深く感謝する次第である。
6. 本書の編集は、浜田信也が担当した。

本 文 目 次

1. はじめに.....	2
2. 遺跡の位置.....	2
3. 遺 構.....	5
4. 結 び.....	8

図 版 目 次

- 図版 1 (1) 迫古墳近景（調査前，東より）
 (2) 迫古墳遠景（西より）
 2 (1) 迫古墳近景（東より）
 (2) 迫古墳近景（東より）
 3 (1) 迫古墳近景（北東より）
 (2) 迫古墳南側溝出土状態（東より）
 4 (1) 迫古墳主体部出土状態（北より）
 (2) 迫古墳主体部粘土除去の状態（北より）
 5 (1) 迫古墳主体部東側部（北より）
 (2) 迫古墳主体部東側部（西より）
 6 (1) 迫古墳主体部西側部
 (2) 迫古墳主体部西側部（東より）

挿 図 目 次

第 1 図	迫古墳付近遺跡分布図	1
第 2 図	迫古墳付近地形図	3
第 3 図	迫古墳地形実測図	4
第 4 図	迫古墳発掘区実測図	5
第 5 図	迫古墳墳丘土層図	7
第 6 図	迫古墳主体部実測図	9



第1図 迫古墳付近遺跡分布図 (1/25,000)

- 1 那岐野丘遺跡 2 宮の馬場遺跡 3 板取遺跡 4 迫古墳 5 迫横穴群 6 迫遺跡 7 宝珠遺跡
 8 草場遺跡 9 三本松古墳 10 後谷遺跡 11 伊方古墳 12 伊方遺跡 13 大星遺跡 14 高崎古墳
 15 野添横穴群 16 前村遺跡 17 中原遺跡

1. はじめに

迫古墳は、福岡県田川郡方城町大字迫に所在する。最近の社会福祉政策の高揚により、田川地区の医療施設の不足から、下田川地区の総合病院建設が計画され、この迫地区が建設場所として設定され、方城町が土地の取得および造成工事を請うこととなり、迫地区における文化財の保護が問題となった。

迫地区は、昭和28年の鉱害復旧工事による採土工事において、迫横穴群（30数基）が発見されており、これが、今回の造成事業地区に隣接するところであり、当造成事業地区内にも横穴群が遺存するものと考えられ、昭和50年度に分布調査をし、昭和51年度当初において詳細な分布調査をした。その結果、円墳1基を確認するのみで、横穴群は遺存しないことが解かった。すでに国・県の補助金の内定があり、総額400万円の調査事業費が予算化されていたが、総額100万円の経費をもって発掘調査を実施することとなった。

調査期間は、昭和51年7月12日から同年8月10日までとした。

調査関係者は次のとおりである。

庶務会計	方城町教育委員会教育長	稲 富 明
	同 社会教育課長	山 崎 光 雄
	同 社会教育係長	香 月 浄 司
	同 図書館嘱託	中 村 松 吉
調査担当者	福岡県教育委員会文化課技師	浜 田 信 也
	同	新 原 正 典

なお、発掘調査にあたっては、造成事業請負業者および発掘作業に従事された方々の御援助をいただき、ここに感謝の意を表する。

2. 遺 跡 の 位 置

迫古墳は、福岡県田川郡方城町大字迫に所在する。

田川郡は、玄海灘に流入する遠賀川の支流彦山川の上流にあり、西に関ノ山山塊、東に福智山塊、南に英彦山塊に囲まれた盆地に所在する。盆地内には、彦山川と中元寺川が北に貫流している。方城町は、郡内でも北部に位置し、彦山川の右岸にあり、背後に福智山塊が控えている。方城町は、福智山麓に位置するため、平地はきわめて少なく、山麓から派生する低丘陵上に遺跡が多く所在し、このような低丘陵上や狭少な谷間が水田地となっている。

田川郡は、筑豊炭田の一角を占め、石炭産業隆盛時の炭田開発やその後の鉱害復旧工事により、新たに発見された遺跡もあるが、消滅した遺跡も少なくない地域であり、方城町内においても明治末年から開始する炭田開発と就業者住宅の建設によって多くの遺跡が消滅し、いくつかの遺跡が新たに発見されている。

迫古墳は、方城町の北部に位置し、福智山麓から派生する丘陵の先端に所在する。同丘陵の南に隣接して迫横穴群が所在し、丘陵の裾部に箱式石棺群の遺跡がある。遺跡は町内の南側に展開する伊方台地に集中し、縄文時代の大星遺跡、弥生時代の伊方遺跡、草場遺跡、前村遺跡、宝珠遺跡、中原遺跡、後谷遺跡、草場襲棺遺跡などがある。古墳時代のものは、弥生時代遺跡と重複しているが、古墳は遺存しているものが少なく、伊方古墳、高崎古墳、野添横穴群が所在する。

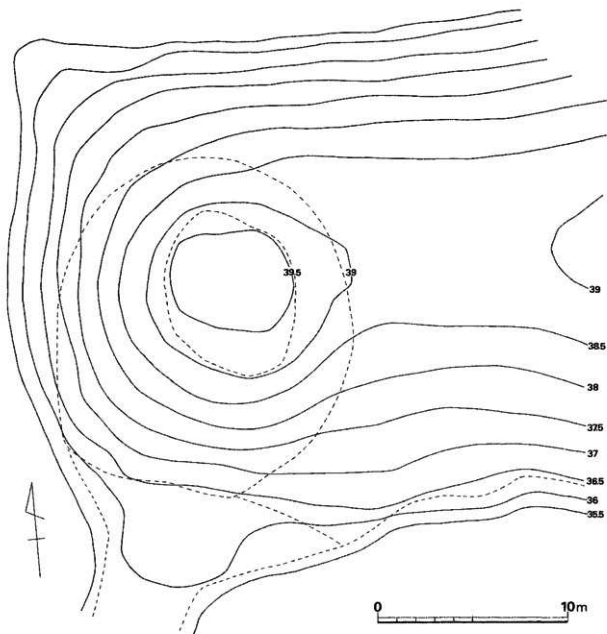


第2図 迫古墳付近地形図 (1/5,000)

1 迫古墳 2 迫横穴群 3 迫遺跡

彦山川を挟んだ対岸の金田町、赤池町内にも多くの遺跡が存在するところであるが、消滅した遺跡が多い。

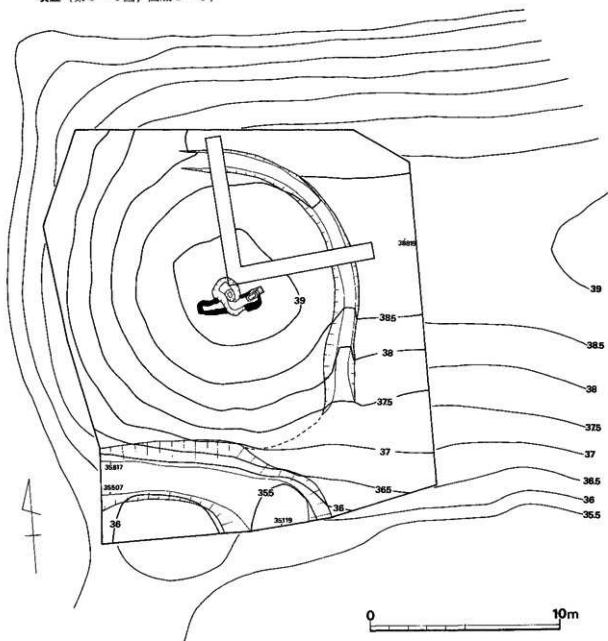
なお、本町内の文化財については、「方城町史」に詳しく記載しているので、参照されたい。



第3図 迫古墳地形実測図 (1/200)

3. 遺 構

墳丘 (第3・4図, 図版2・3)



第4図 迫古墳発掘区実測図 (1/200)

当古墳は標高39mの細い丘陵上に位置する。墳丘は低く、墳頂部はやや平坦になっており、ほぼ中央部に建設省国土地理院の三角点標柱が設置されていた。

墳丘の築造にあたっては、細い丘陵が枝状に分岐するやや広い部分を選定し、この空間と丘陵斜面を有効的に利用しており（第2図）、まず地山を円形に削り出し、あわせて東側と南西側に溝を施けている（第4図）。東側の溝はほぼ半周するものであるが、非常に浅く深さ20cm前後である。南側は、丘陵稜線を横断するように掘られたものであり、深さ50cm前後である。

墳丘築造にあたっては地山を削って原形を造っているが、相当の土量を搬出したものであり、特に南側は相当多くの土量を搬出したものである。

墳丘の規模は、径約15mの小規模のものであり、高さは、東側の丘陵稜線上より約1m、南および北側から4m前後となっており、西側が裾部から急斜面になることから、墳丘は西側の位置から見ると高く見えるように築造されている。

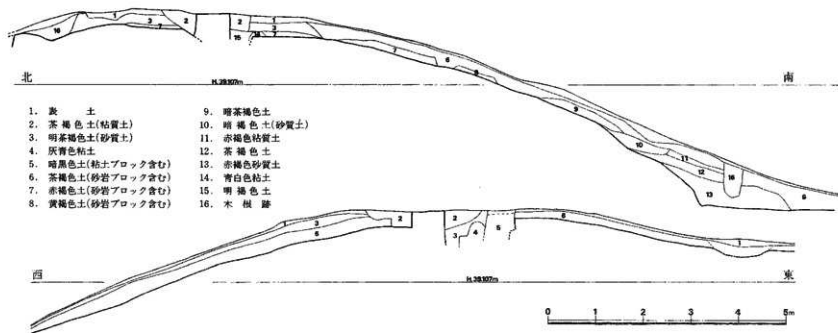
盛土は非常に簡易なもので、低く盛っている（第5図）。南北の横断面図に示すように、盛土は棺を安置したのちに行なっており、まず棺の周囲を赤褐色土でかたく敷きつめており、次の茶褐色土により全体を覆っている。

主体部（第6図、図版4～6）

主体部は墳丘最頂部に施けられているが、墳径からしてやや東に片寄っている。墳頂部に三角点標柱が設置されたためと、それ以前の盗掘により中央部と東側の一部が破壊をうけている。

主体部は、破壊をうけているが、まず地山に竈を掘り、これに木棺を据え、粘土で覆った粘土槨木棺と考えられる。竈は長3.42m、幅0.4m前後、深さ5～15cmで東側が浅く西側に深くなっており全体に細長いものである。粘土は青白色粘土を使用し、棺の周囲でよく遺存しており、棺の中央部は全体に遺っていない。粘土は棺の東側と西側小口部において竈内にまでおよんでいるが、全体に竈より上面において施されて、東端部で竈上面より30cmと最も高く遺存していた。

木棺の規模は、棺材が遺存しておらず、槨の遺存状態からも正確には把握できないが、棺の長さは竈の長さより短いものではなかろうかと考えられる。すなわち東側では第6図のAA'、BB'の断面にみるように、棺を覆った粘土の内面に棺形の痕跡が一部残存しており、竈の東端より約30cmの位置においてはほぼ垂直の立ち上がりが認められ、さらに西側には東側において認められるような痕跡はないが、竈底上に7cmの高さで、竈中央側に約12cm張り出す粘土塊があり、これが竈底に敷かれたような状態ではなく、このことから棺の長さは、最長2.75mを越えるものではない。棺の幅は、図に示すように西側部(CC')は、断面が袋状を呈し、竈底は中央部がやや深くなる浅いレンズ状を呈している。断面部の最大幅は32cmである。東側部(BB')は北側の粘土と竈壁が破壊を受けているため一層正確さを欠くが、断面は竈底の中央がやや深く



第5図 追古墳丘土層図 (1/80)

なる浅いレンズ状を呈し、坩底より上部はやはり袋状の断面形を呈し、最大幅は約40cm前後と推定され、西側より若干幅広いものと考えられる。

このように坩底断面がレンズ状を呈し、粘土の内面が袋状に内傾し、かつBB'横断面において認められる「弧」の状態からして棺は割竹形木棺と考えられ、東側が幅広く、西側に細くなるような棺形を呈するものであろうが、棺の高さ（厚さ）は遺存の状態からして推定もできない。

棺内外からは副葬品などの遺物は1片たりとも発見されなかったが、棺形から推定して東側を頭位としたであろう。

また、棺の周囲に遺存する粘土は、棺の蓋身接合部を中心に厚く覆せ、棺上面は極めて薄く粘土で覆われたものであろう。

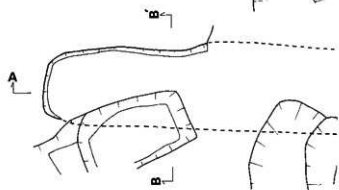
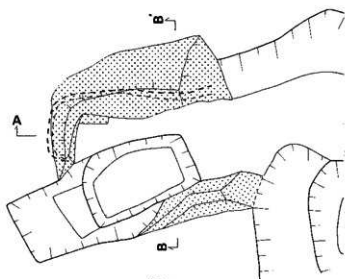
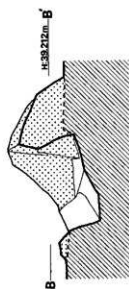
4. 結 び

田川地方は、遺跡が多く所在するところであるが、古墳時代の遺跡について取りあげると、当地方において、墳丘のある古墳はかなり少なく、むしろ横穴墓が多く遺存している地域である。この点については、この地がエネルギー革命以前における主要な石炭産出地であり、このため早くから炭田開発等により遺跡が破壊されたり、消滅したことも考慮しなければならないが、現存する古墳群の中には数10基を越えるものはなく、多くて10数基が群集するものが知られており、多くは散在している状況であり、むしろ横穴墓に数10基以上の群をなすものが多く所在する地域である。

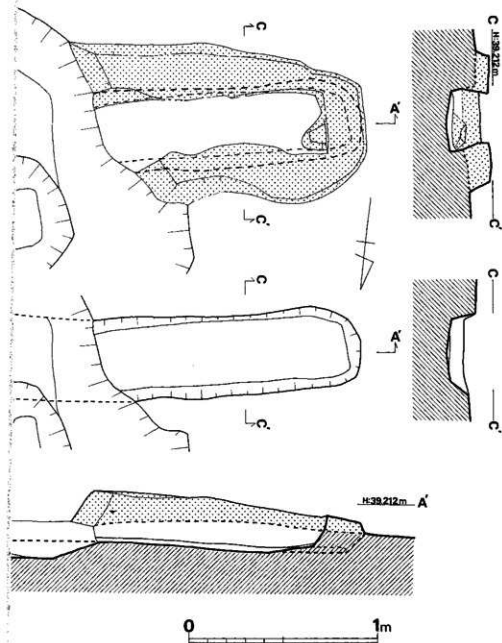
田川地方における古墳の発掘調査例は極めて少なく、近年では昭和50年度に大任町が実施した孤塚古墳群の調査があるのみであり、古式古墳の発掘調査については、今回を含め数例あるだけである。

迫古墳の調査内容については前項に記載したとおりであるが、ここでは調査結果とこれに係る問題点を取り上げ結びとしたい。

まず、当古墳は主体部内外および墳丘一帯からの遺物は全くないが、立地状況と墳丘の築造方法および内部主体の形式からして古式の古墳と考えられ、当地方における類例として大任町の孤塚2・3号墳がある。いずれも地山削り出しの墳丘で方墳であり、2号墳の内部主体は土壇墓2、木棺墓1で、3号墳は割竹形木棺墓である。3号墳は墳丘全体が削平を受け、主体部も上部が削平を受け粘土帯があったかどうか不明である。また、両墳とも副葬品等の遺物がなく、属する年代については断定しがたいが、報告では、2号墳の土壇墓の形態から推定して、古墳時代前期のものと考えており（註1）、当古墳と比較すると盛土をもたないという点で異な



粘土



第6圖 追古墳主体部実測図 (1/20)

るほかは、ほぼ類似するものであり、同時期とみて大過無かろう。

②通常木棺あるいは石棺直葬で、墳丘に盛土がある場合、棺を埋置する塚は盛土より掘られており、棺を安置後にこの部分を覆い完結することになるわけであるが、当古墳の場合盛土には塚の掘り込みは認められず、棺を安置した後に墳丘全体に低い盛土を行う方法が取られており、特殊な例と言えるであろう。

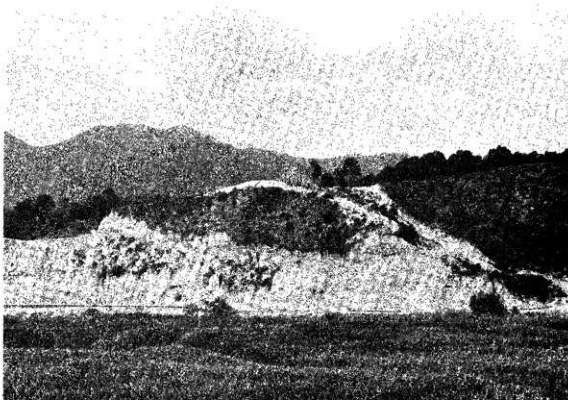
③主体部は相当破壊をうけているが、遺存状態からして割竹形木棺墓と判定したが、棺は外側幅が40～32cm、外側高（厚さ）は50cm前後とのものであり、かつ棺材の厚さを考慮すると棺内空間は非常にせばまるわけで、成人用棺として考えてよいものか疑問である。

以上、当古墳の調査の結果および問題点を列記したが、記載に誤りがあれば、先学諸氏の御指摘を仰ぎたい。

註1 大任町教育委員会「狐塚古墳群」大任町文化財調査報告書第1集 1976年



(1) 迫古墳近景（調査前、東より）



(2) 迫古墳遠景（西より）



(1) 迫古墳近景（東より）



(2) 迫古墳近景（東より）



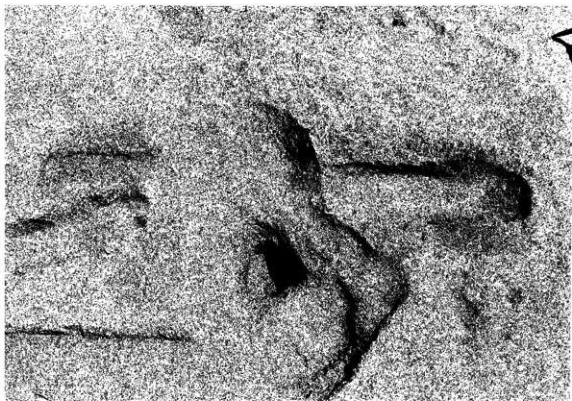
(1) 迫古墳近景（北東より）



(2) 迫古墳南側溝出土状態（東より）



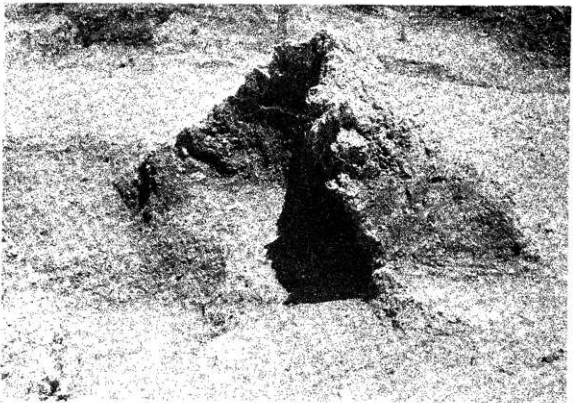
(1) 迫古墳主体部出土状態（北より）



(2) 迫古墳主体部粘土除去の状態（北より）



(1) 迫古墳主体部東側部（北より）



(2) 迫古墳主体部東側部（西より）



(1) 迫古墳主体部西側部



(2) 迫古墳主体部西側部（東より）

迫 古 墳

昭和 52 年 3 月 31 日

発 行 方 城 町 教 育 委 員 会
福岡県田川郡方城町伊方

印 刷 青 柳 工 業 株 式 会 社
福岡市中央区渡辺通 2 丁目 9 の 31